

令和5年度 調布市立若葉小学校 学校評価報告書（学校長 内藤 みゆき）

学校の教育目標

○かしこく（しっかり考え、進んで学ぶ子） ○やさしく（思いやりのある子） ○たくましく（明るくたくましい子）

目指す学校像(ビジョン) 例) 学校像, 教員像, 児童・生徒像

笑顔あふれる「たい※」が泳ぐ学校 ※「～したい」「やってみよう」等といった前向きな思いやエネルギー
 分かり合おうとする心と考える力を言葉と向き合いながら身に付ける子ども

調布市立学校における共通した領域 <短期的な経営目標>

	1 豊かな心(徳)	2 確かな学力(知)	3 健やかな体(体)
自己評価	(1) 具体的な取組	(1) 具体的な取組	(1) 具体的な取組
	① 月1回の校内委員会や週1回の生活指導夕会での情報共有を児童への組織的な対応につなげる。また、年3回のアンケートを中心に児童の困り感等を汲み取り、適切な支援につなげ、自己肯定感を向上させる。	① 校内研究を中心として、主体的・対話的で深い学びを目指した授業改善に取り組む。殊に児童の学習意欲を喚起し、考えることや意見交流することの楽しさを味わわせる授業づくりに努める。	① 校内研究の取組「わかばっ子元気アップカード」を生かし、児童の健康保持や体力向上への関心を高め、行動変容へのきっかけとしていく。
	② 学校の決まりを全校で共有し、規律の定着を図ることで、安心できる生活環境を整える。また、教員研修を通して児童の自己理解・他者理解を深めていく指導法を学ぶ。	② モバイル端末の効果的活用に努めるとともに、教員間のOJTを推進して活用法の共有化をすすめ、教員の指導力と児童の情報活用能力を同時に向上させていく。	② 体力向上を図る取組(体育朝会や第四中校庭を借用した休み時間の運動の場確保等)を工夫し、運動の楽しさを味わわせる。
	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)
① 学校評価アンケート(児童)において関連する項目への肯定的な回答 目標: 90%以上 「学校は楽しい」 結果: 91% 「自他の尊重」 結果: 93%	① 児童アンケートにおいて、授業理解や主体的取組の項目の肯定的な回答 目標: 昨年度比 +3Pt 以上 結果: (4~6年アンケートの平均値) 「授業理解」 → 昨年度比 +4.6Pt 「主体的取組」 → 昨年度比 +1.8Pt	① 「わかばっ子元気アップカード」の2回の調査結果の比較 目標: より良い行動変容(目標値達成) 睡眠時間平均: 目標値 9:00 結果 9:08 歩数: 目標値 11000歩~13000歩 結果 102156歩 グリーンタイム: 目標値 106分以上 結果 94.8分間 スクリーンタイム: 目標値 120分以上 結果 98.4分	
② 学校評価アンケート(児童・保護者)の関連する項目への肯定的な回答 目標: 90%以上 「基本的な生活習慣」 結果: 児童 81% 保護者 87% 「ICT機器のルール」 結果: 児童 83% 保護者 79%	② 学校評価アンケート(児童)において、関連する項目の肯定的な回答 目標: 90%以上 「基礎的な学力」 結果: 85% 「ICT機器の活用」 結果: 86%	② 学校評価アンケート(児童・保護者)において、健康教育の項目への肯定的な回答 目標: 90%以上 結果: 児童 72% 保護者 74% ※保護者回答「わからない」が11%	
学校関係者評価	・児童の性格や家庭環境の違いがあり、一律に評価するのは難しいと思うが、「学校は楽しい」と感じている児童が9割を超えていることは喜ばしい。どの子も「楽しい」と思えるよう、引き続き取り組んでほしい。 ・来校時や登校時の見守りの様子から、挨拶がよくできる児童が多く、継続的な指導の成果を感じる。	・児童用タブレット端末が頻りに活用されており、インプットの充実が感じられる。今後は更にアウトプットでの活用の充実を期待する。また、言語表現力の向上にも力を入れてほしい。 ・主体的で対話的な学びのある、より良い授業実践及び指導力向上を目指して、今後も校内研修を充実させ、切磋琢磨してほしい。	・校内研究と関連させながら、児童の健康的な生活についての理解促進と意識向上及び体力づくりについて、学校全体で熱心に取り組んでいるのが良い。 ・校庭が狭くなっても、運動の機会を確保するため、第四中学校の校庭を借用したり、縄跳び月間を設けたり、様々工夫している点も評価できる。

学校の特色を生かした領域 <短期的な経営目標>

	4 言語能力・情報活用能力の向上	5 特別支援教育の推進	6 地域との連携
自己評価	(1) 具体的な取組	(1) 具体的な取組	(1) 具体的な取組
	① 考えを「もつ」「表す」「伝え合う」「深める」授業実践を積み重ね、考えを言語化したり、必要な情報を集め判断したりする活動を通して言語能力・情報活用能力の向上を図る。	① 特別支援教育コーディネーターの役割を明確にするとともに、コーディネーター間の連携を強化する。また、迅速な情報共有と支援体制の構築を図る。	① 60周年記念行事等に向け、地域諸団体との連携を推進し、児童の心に残る事業を計画・実施していく。
	② 読書月間を中心に読書活動を推進するとともに、日常的な言葉遣いの指導を通して、言語感覚を養い、豊かな言葉の獲得を目指す。	② 特別支援教室での指導が在籍学級での指導・支援に活かされるよう、専門員やコーディネーターを窓口として円滑な連携を図る。	② 「地域学校協働本部」のコーディネーター力を活かし、ゲストティーチャー等、外部人材の活用による体験的学習の充実を図る。
	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)
① 学校評価アンケート(児童・保護者)の関連項目への肯定的な回答 目標: 90%以上 「言語活動」 結果: 児童 80% 保護者 68% ※保護者回答「わからない」が9%	① 学校評価アンケート(児童・保護者)の関連項目への肯定的な回答 目標: 90%以上 「相談体制」 結果: 児童 67% 保護者 72% ※「わからない」回答 児童 12% 保護者 20%	① 地域諸団体と連携しながら、60周年記念式典や記念誌作成等を確実に進める。	

	「ICT 機器の活用」 結果：児童86% 保護者76%				
	② 学校評価アンケート（児童・保護者） 「読書活動」項目への肯定的な回答 目標：90%以上 結果：児童73% 保護者81% ※保護者回答「わからない」が8%	C	② 「個別指導計画」「個別の教育支援計画」を100%作成し、巡回指導教員と学級担任との連携の場を設ける。	B	① 学校評価アンケート（児童・保護者）関連項目への肯定的な回答 目標：80%以上 「地域学校協働本部」 結果：児童85% 保護者77% 「体験的な学習活動」 結果：児童78% 保護者71%
学校関係者評価	<ul style="list-style-type: none"> 「書くこと」に課題が見られる（令和5年度全国学力・学習状況調査の結果より）。語彙力等を伸ばすための読書活動の推進と併せて言語表現力の向上も図ってほしい。 ネット社会である現代において、情報モラル教育を家庭と学校双方で一層行っていく必要がある。 		<ul style="list-style-type: none"> 教室に担任以外のサポートが入ると、個に応じた支援が充実することがよく分かる。エデュケーションアシスタントやスクールサポーター、学生ボランティア等、人材を駆使してサポート体制を図っているところが良い。 特別支援教育を今後も地道に進めてほしい。 		<ul style="list-style-type: none"> 準備期間が短かったにもかかわらず、周年記念の取組が充実しており良かった。 全体的に教職員は一生懸命取り組んでいると思うのだが、学校評価アンケートの結果を見ると、それが上手く伝わっていないのではないかと感じる。学校からの発信を強化していくと良い。

人材育成・組織運営	
自己評価	<ul style="list-style-type: none"> 児童数900名を超える中でも個々のニーズに応じた支援を充実させるため、特別支援教育コーディネーターの役割は一層大切になってきている。情報共有や関係諸機関との連携が円滑に進むよう、5名のコーディネーターが役割分担をしながら奮闘し、情報共有が進んできている。しかし、通級学級巡回教員との連携のための時間確保に課題が残った。 校内研究は、研究主任と3分科会の長を中心に東京都体育健康教育推進校・調布市研究推進校の研究発表会に向け、授業研究と並行して各種アンケートや調査の結果、児童の変容等を分析し、研究発表に向けて「チームわかば」で熱心に取り組み、若手育成につながった。 教員間で、自身の得意分野を生かし、他教員に助言する光景が日常化している。相談し合い、助け合う雰囲気醸成されていることが、教員のメンタルヘルスにも良い影響を与えているものとする。今後も職層に応じた職責の自覚を促しつつ、より充実した教育活動が実施できるように努めたい。
学校関係者評価	<ul style="list-style-type: none"> 全体的に落ち着いていると感じる。また、教員が澁澁としており、子供たちも明るく伸びやかな様子が感じられ、学年が進むにつれ成長している様子が分かる。引き続き、こうした環境作りに努めてほしい。 スクールサポーターやエデュケーションアシスタント、地域・学生ボランティア等を生かしながら、支援が必要な子供へのサポートを工夫して行っており、担任の助けになっていると感じる。 保護者が来校して子供たちの様子を見ることができると感じる機会を、学期ごとに複数回設けており、そうしたことが、保護者の安心感にもつながっていると感じる。

中期的な経営目標の達成状況
<p>① 自己指導能力を高め、自他の命を大切に、自律した言動がとれる児童を育成する。</p> <p>⇒児童アンケートで「決まりや約束を守る意識をもっており、挨拶をしたり時間守ったりするなどの基本的な生活習慣が身に付いている」という項目の肯定的回答が81%となっており、9割に届いていない。気持ちを切り替えたり苦手なことに向き合ったりすることが苦手な児童も増えている現状を踏まえ、巡回指導教員や家庭との連携を強化しつつ、粘り強く指導を重ね、自身の言動を冷静に振り返り自己コントロールできる自己指導能力向上の必要性は、一層高まっていると考える。</p> <p>② 自己肯定感を高めつつ、基礎基本をしっかり定着させるとともに、主体的で対話的な学びを通して考えを深めていく児童を育成する。</p> <p>⇒令和5年度全国学力・学習状況調査における平均正答率は、国語科も算数科もすべて都や全国平均を上回っており、学力の定着が図られているものとする。また、学校全体として「良好な学習集団づくり」を目指し、全教科において対話的な学びを意識した意見交流や学び合いの学習活動をどの学年も実施している。しかし、児童アンケートで「基礎的な学力を身に付け、『わかった』『できた』といった達成感を味わっている」という項目の肯定的回答は85%に留まっている。自身の学びを自覚させるとともに自己肯定感を高めていく必要がある。</p> <p>③ 健康保持・体力増進への意識を高め、自ら考え判断し、粘り強く実践する児童を育成する。</p> <p>⇒食育や「わかば元気アップカード」の分析結果を使った健康教育の授業を全学年で実施し、健康的な生活への意識向上を図ることができた。また、ゲストティーチャーを招いた「走り方教室」「陸上教室」等、楽しみながら様々な動きを経験し技能を高める機会を複数回設定した。更に、校内研究の講師による教員研修の実施（年2回）や研究授業の取組等を通して、体育科の指導力向上を図るとともに、狭い校庭でも大勢の児童が運動できる機会を創出するための「縄跳び月間」も実施することができた。しかしながら、児童アンケートの「健やかな体作り」に関する項目の肯定的回答は72%に留まっており、児童数に見合わない校庭の狭さによる影響の大きさを改めて実感する。また、コロナ禍の影響もあってか、体幹が弱く姿勢保持が難しい児童や運動自体に前向きになれない児童も少なくない。加えて、怪我もしやすくなっており、安全を確保しつつ様々な動きを経験させたり、運動の楽しさを味わわせたりすることは、今後も大切なことと考える。</p> <p>④ 全ての基盤となる言語能力と情報活用能力の向上を目指し、言語環境を整えるとともにモバイル端末の効果的活用を推進する。</p> <p>⇒校内のICT部を中心に授業中の児童用iPadの活用を推進してきたが、児童アンケートの「ICT機器の活用」に関する項目の肯定的回答は86%であった。一層の推進を図っていくとともに、情報モラル教育を家庭と連携しつつ繰り返し行っていくことが必要である。言語能力については語彙力や表現力の差が大きく、アンケートの肯定的回答が児童は80%・保護者は68%に留まっていることは課題である。</p> <p>⑤ 特別支援教育を推進し、SSやSC、巡回指導教員等を含めた全教職員及び関係諸機関との組織的連携を強化していく。</p> <p>⇒児童数が多いながらも、5名の特別支援教育コーディネーターが分担して情報を収集し、校内委員会の充実に努めている。しかし、担任と巡回指導教員（特別支援教室）等との連携については、現状、個々の努力によるところが大きく、持続可能な仕組みにしていくことが課題である。</p> <p>⑥ 保護者・地域との連携を密にし、教育活動の充実と安全確保を図るとともに、CSへ向けた理解促進を図っていく。</p> <p>⇒漢検の実施や学生ボランティアの確保、ゲストティーチャー招聘授業の連絡調整や1年生向けの放課後学習教室の実施等、地域学校協働本部の活動が学校に欠かせないものとして充実してきており、CSに向けて良い連携が取れていると感じる。しかし、保護者アンケートの結果を見ると「わからない」との回答が16%となっており、周知や広報に課題を感じる。</p> <p>人・組 職層に応じた自身の役割を自覚し、学校経営方針を実現させるための取組を意識し、工夫しながら動くことのできる組織を構築する。</p> <p>⇒学校経営方針を念頭に、職層に応じた自身の役割を自覚し主体的に動く教職員集団育成への取組は、今後も引き続き行っていく必要がある。</p>
次年度の重点課題
「自己指導能力の向上」「全ての基盤となる言語能力と情報活用能力の向上」「主体的で対話的な学びを通して考えを深めていく児童の育成」